

くまもとポクらの海新聞

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 海と日本 PROJECT

企画・発行 海と日本プロジェクトinくまもと実行委員会事務局 <https://kumamoto.uminohi.jp/>

2018「海と日本プロジェクトinくまもと」実行委員会／熊本県、天草市、天草広域本部、熊本市、上天草市、芦北町、津奈木町、水俣市、(一社)天草四郎観光協会、(一社)天草宝島観光協会、熊本日日新聞社、KAB熊本朝日放送



守りたい 伝えたい くまもとの 海の未来

干潟差を利用したノリの養殖で全国的に知られる有明海の干潟は、最近では「インスタ映え」する絶景スポットとして人気を集めています。また、かつてヘド口に覆われていた水俣の海は、長年にわたる人々の努力でかつての姿を取り戻し、ダイビングを楽しめるまでになっています。「くまもとポクらの海新聞」では、県内3つの小中学校の子どもたちが参加した、熊本の海の過去と現在を学び、未来にその有り難さを発信する取り組みを紹介します。

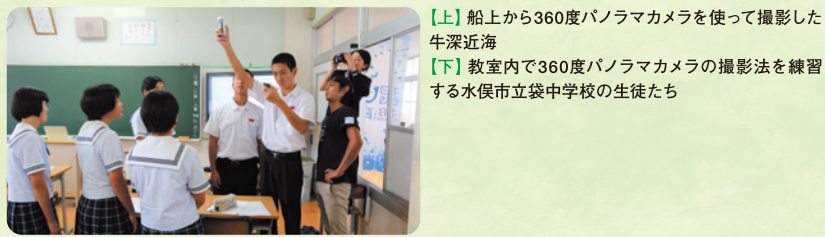


写真は360度パノラマカメラで撮影した宇城市の住吉神社周辺の干潟

ストリートビューで熊本の海を発信!

「海と日本プロジェクトinくまもと実行委員会」では、プロジェクトに参加した3つの小中学校で撮影した360度パノラマカメラの画像のほかに、県内18カ所の海の風景をGoogleマップ上にアップ。海のストリートビューとして、豊かで美しい熊本の海を今までにない視点で楽しむことができます。

さらに、スマホにVR(ヴァーチャルリアリティ)カードボードを装着すると、まるでその場にいるような疑似体験までできてしまいます。見られる場所など、詳しい情報は <https://kumamoto.uminohi.jp/> (右上のQRコード参照) でチェック!



【上】船上から360度パノラマカメラを使って撮影した牛深近海
【下】教室内で360度パノラマカメラの撮影法を練習する水俣市立袋中学校の生徒たち

「海と日本プロジェクト」って何だろう?

今回、子どもたちの海での体験学習を主催したのは、「海と日本プロジェクト」です。さまざまな形で日本人の暮らしを支え、ときには心の安らぎやひらめきを与えてくれる海ですが、現在、環境の悪化や海洋権益をめぐる争いなどの問題が絶えません。

「海と日本プロジェクト」は、そんな海のことを「自分ごと」として捉え、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくための活動です。日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省が旗振り役となって2015年から始まったプロジェクトで、全国39都道府県に実行委員会があり、約200万人が参加しています。同プロジェクトでは、次世代を担う子どもたちを中心として、多くの方々に海への好奇心を持ってもらい、行動を起こすきっかけを作り出すことを目指していて、「海と日本プロジェクトinくまもと」もその一つです。



実際に、自分たちの住む地域の海に足を運んで体験学習を行いました(写真は宇城市立網田小学校の体験学習の様子)

“熊本の海”をパノラマで体感できる!



他にも、全18カ所の熊本の海の風景をストリートビューで楽しむことができます!

スマホに「ストリートビュー」をダウンロード

見たい場所を選ぶ「探索」→「場所を選ぶ」

VRカードボードにスマホを装着

プロジェクト参加校が、それぞれの活動を報告

昨年11月18日、それぞれの活動を終えた3校が、参加校の一つ、袋中学校の文化祭で、今回の海洋学習についての合同発表会を開きました。袋中の発表後、テレビ電話回線を通じて網田小学校が活動を報告。さらに網津小学校は、ビデオレターで発表を行いました。子どもたちは、離れた場所でもお互いに大切な「海」について学んだ仲間同士で交流が持てたことを喜んでいました。



水俣市立袋中学校で行われた合同発表会の様子



おこしきかいがん

御輿来海岸

宇土市

宇土市立網田小学校

美しい砂紋が広がる海岸の風景を撮影 地元特産のノリ養殖の歴史も学ぶ

宇土市立網田小学校では、10月9日、5年生17人・6年生12人の計29人が、地域が誇る美しい御輿来海岸の風景撮影や、地元特産のノリ養殖場などを見学しました。学校での事前学習では、有明海でのノリ養殖の歴史のほか、熊本日日新聞社の方に取材の仕方や原稿の作り方について学びました。その後、「人工採苗(じんこうさいびょう)」という方法で、ノリの養殖技術の発展に貢献したイギリス人海藻学者ドリュエ女史の記念碑見学や干潟でのマテガイ採貝なども体験。さらに、干潟に広がる砂紋の撮影にも取り組みました。



御輿来海岸

宇土半島の北岸に位置し、「日本の渚百選」にも選ばれている熊本を代表する景勝地。日本有数の干満差がある有明海でも特に潮の引き具合が大きく、干潮時には風と波が作り出す美しい砂紋が現れます。また、アサリやマテ貝の生息地としても知られています。



■海と日本プロジェクトに参加して

6年・満崎香穂さん、益田華蓮さん、竹口友梨さん

私たち5・6年生は、網田の海を未来へと引き継ぐアクションの輪を広げるために、いろいろな専門家の話を聞いたり、実際に干潟に出てマテ貝採り体験をしました。また、ノリの種付けを発見したドリュエ女史の記念碑も見学しました。試食した網田のノリはとてもおいしかったです。干潟でのマテ貝採りは、穴から顔を出したマテ貝を素早く、優しく捕まえる感触が忘れられません。「海っていいなあ」と感じることができました。

■美しい御輿来海岸

6年濱田夢心さん、満崎煌琉さん、山下翔蓮さん

美しい景色として有名な御輿来海岸は、宇土半島北部に位置しています。景行天皇が九州遠征の時、美しい海岸線が目にとまり、しばらく御輿を止めて見入られたという説から、その名が付いたとされています。晴れた日には対岸の長崎県雲仙普賢岳を見ることができます。私たち6年生は、理科の地層の学習で御輿来海岸まで行き、地層がどのようにできたのかを勉強しました。自然のすごさと網田の海的美しさをあらためて感じることができました。

■歓迎遠足で潮干狩り

6年・梅田タケルさん、高野博人さん、原田拓都さん

私たちの住む網田地区では、小学生と中学生と一緒に活動することも多いです。4月の合同歓迎遠足では、協力しながら貝掘りをしました。網田の海にはたくさんの貝がいて、アサリ、ハマグリ、マテ貝などが獲れます。中には、貝がうまく獲れない低学年の子に、自分が獲った分をあげる中学生もいました。貝掘りのシーズンは5月からです。毎年、大勢の観光客でにぎわいます。ぜひ、皆さんも貝掘りを体験してはどうですか。

■網田の海を守るために

5年・生魚菜々実さん、石堂優人さん、内田貴士さん、木村心々暖さん、鎌守寿輝さん、佐美三ひなたさん、嶋本幸乃さん、下村倫子さん、高田紋叶さん

美しい網田の海を守るには、まずゴミのない海を守ること。そのために、網田小・中学校の児童・生徒が協力して戸口や長浜の海岸の清掃活動を行っています。もう一つは、網田の海をみんなに知ってもらうことです。波打つ干潟、普賢岳に沈む夕日、かわいい海の生き物、おいしい海産物など。「マリンフェスタ」「宇土飯を食らう会」「網田フットパス(網田満喫コース)」のイベントに参加して、ぜひ皆さんも網田の素晴らしさを味わってください。

■網田の海の生き物

6年谷川 仁さん、嶋野勇成さん、宮本風菜さん

網田の海でくらす生き物の中から2つを紹介します。1つ目はムツゴロウです。水切りの石のように飛び跳ねて、捕まえようとするとすぐに逃げていきます。網を使っても干潟の穴に潜り込んでしまうので、そ〜と音を立てずに近づき、パッと素早く捕えないといけません。2つ目は、干潟で生きるカニです。ムツゴロウのように飛び跳ねることはありませんが、素早く動き回るので、同じように捕まえるのが難しいです。網田の海には、そんな生き物がたくさん生活しています。

■網田の海苔

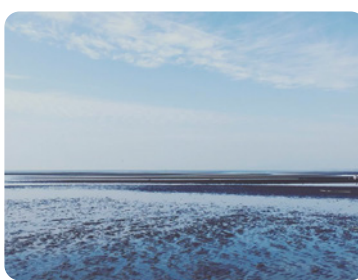
5年・堂園健斗さん、野口修司さん、嶋野優心愛さん、福岡一迅さん、藤本日瑚さん、山口 蓮さん、山田至恩さん、村上媛愛さん

網田の美しい海では、とてもおいしいノリが養殖されています。網田小学校では毎年「網田教育のりづくり隊」が中心になり、「ロング巻き寿司」作りを行います。約160枚のノリで25個もの巻き寿司を作ります。地元の野菜で作った具を載せ、掛け声とともに一気に巻きます。それをみんなでおいしくいただきます。こんな素敵な経験ができるのも、網田でおいしいノリを作っているからです。網田の海に感謝です。

Keyword check! 人工採苗

キーワードチェック!

1949年に、海藻学者キャスリーン・メアリー・ドリュエ・ベーカー女史が、ノリの胞子が春先から秋口にかけて貝殻の中で過ごし、黒い糸のような「糸状体」に成長することを発見。それによって、ノリの胞子を貝殻の中で人工的に育て、それをノリ網に附着させる「人工採苗」という養殖法が確立しました。日本のノリ養殖における人工採苗発祥の地は、八代市鏡町です。



ながべたかいしょうろ

長部田海床路

宇土市

宇土市立 網津小学校

全長1.2kmの海床路&干潟を歩いて撮影 自分たちで地域の魅力を発信!

宇土市立網津小学校では、11月8日に、住吉・網田漁業協同組合の技術顧問を務める山本文士さんを招き、5年生24人が長部田海床路のある網津の海について学びました。学校での説明に続いて訪れた干潟では、Googleストリートビューで長部田の魅力を発信するため、360度カメラを使った撮影を行いました。さらに、干潮を利用して沖のノリ養殖場まで足を伸ばしましたが、途中で干潟に足を取られたり、ハマグリを見つけたりと、児童らにとっては全てが感動でした。最後に、撮影した画像をVRで見ると、子どもたちから大きな歓声が上がりました。

長部田海床路

宇土市住吉町にある長部田海床路は、干満差の激しい有明海でノリ養殖や貝漁を営む漁業者の利便性を図るため、昭和54年に舗装されました。満潮時には、沖合の道が海に没し、電柱だけが海面に顔を覗かせる不思議な風景が見られます。

■貴重なハマグリ

5年・野村太真さん、藤本琥太郎さん、江副夏穂さん、益田陽菜さん、葉室仁月さん

緑川河口に広がる干潟漁場では、アサリ貝だけでなく、絶滅が心配されているハマグリも獲れます。ハマグリは、有明海のほか、国内でも数える程しかありません。そのため市場では高値で取り引きされています。そんなハマグリを、おじいちゃんやおばあちゃんが獲ってきて、たくさん食べさせてくれます。ハマグリは旬は、2~4月ごろで、潮干狩りをする人もたくさん見かけます。網津小学校では、歓迎遠足で潮干狩りに出かけます。



■ドリュウ女史のおかげ

5年・宮下心望さん、松田寧々さん、田村海斗さん

江戸時代初めから行われていた日本のノリづくりは自然任せで採取量が安定せず、「ノリ1枚、米1升」と呼ばれるくらい高価でした。しかし、イギリスの海藻学者ドリュウ女史がノリの生態を解明したことで人工採苗の技術が確立されました。また女史は、親交のあった九州大学の瀬川宗吉教授に成果を伝え、それをさらに熊本県水産試験場の太田扶桑男技師に知らせ、国内での研究が進みました。その結果、1953年に太田技師が人工採苗に成功し、日本のノリ養殖技術は飛躍的に発展しました。こうして「海苔漁民の救世主」となった女史の功績を称えようと、1963年に有明海を一望できる住吉公園に記念碑が建立されました。

■潮の干満はどうやって起こる?

5年・富田紫月さん、後藤慧斗さん、勝永龍貴さん

有明海は、干潮と満潮の海面の高さの差が日本一です。なぜ海の高さが変わるのか、皆さんは知っていますか? 満潮は、月の引力で海水が引き上げられて高くなります。逆に引きつけられないと干潮になります。満潮と干潮の高さの差は3m近くにもなり、小学生2人分の高さになります。そのため長部田海床路では、干潮時に海床路と干潟が現れ、たまにトラックや自転車を通るのも見かけます。満潮時は、海の中に電柱だけが立っているように見え、電気が付くととてもきれいです。

■有明海の干潟は「日本一」

5年・山田一慶さん、牧本 空さん、船橋和慎さん、平江勇盛さん、宮野悠和さん

長部田海床路の周りの干潟には、カニやムツゴロウなどの生き物がたくさんいます。有明海の干潟は日本一大きく、188平方kmもあります。干潟の砂がこぼこぼになっているのは、潮の満ち引きが関係しているそうです。また、ハマグリが住みやすいように、別の場所から砂を運んで入れてたりもします。干潟にたくさん立っている棒は、ノリの養殖をするための棒です。とても丈夫で、再利用して何年も使われます。干潟以外にも、有明海は、「干潮と満潮の差」「天然ハマグリ漁獲量」が日本一です!

■海床路の不思議な風景

5年・坂田千子さん、伊藤美姫さん、村松優羽さん、佐藤芳奈さん

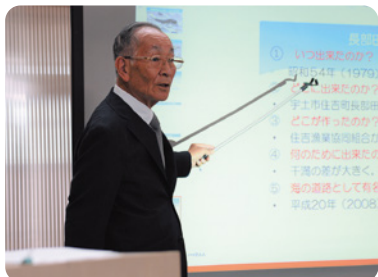
長部田海床路は、海の潮が引いたときだけ現れる、長さ1.2kmの道路です。干満の差が激しく漁船の出入りが困難なため、昭和54年に造られました。関係者以外通ることはできませんが、近くで見ることができるとぜひ見に来てください。平成20年に、大分の酒造メーカーのテレビCMに登場し、一躍有名になりました。大潮の干潮時には、岸から3km以上の干潟を見ることができます。インスタ映える海の風景として、ベスト3に入ります。

■ノリ養殖~カキ殻とノリのひみつの関係~

5年・鶴田悠真さん、澤波友来さん、藤田莉未さん

皆さんはノリがどうやってできるかをご存じですか? 実は、「ノリの素(孢子)」をカキ殻に植えつけるのです。孢子は夏の間、糸みたいな形(糸状体)になってカキ殻に潜り込んで過ごします。この糸状体から「ノリの種」ができ、その種が付いた網を支柱に縛りつけて育てます。これを「支柱式漁場」といい、有明海はその代表的な場所となっています。ノリ網はとてもカラフルで、海の上に色とりどりの和紙を並べたように見えます。

吉里の海の中道祖父のみら
海苔とる姿ばくのあこがれ
子どもたちが考えた短歌だよ!



Keyword check! 有明海の干満差

有明海は、熊本県、福岡県、佐賀県、長崎県の4県に囲まれた面積約1700平方kmの海で、満潮と干潮の潮位の差・干満差が最大約7mと日本一。干潮時に現れる干潟は、全国の干潟の約4割におよびます。また、数多くの河川が流入して海水と淡水が混じり合う独特の水域のため、ムツゴロウなどの有明海にしか生息しない特産種が数多くいるのも特長です。



みなまたわん

水俣湾

水俣市

水俣市立 袋中学校

美しさを取り戻したふるさとの海を実感。

「守っていかななくては」と思いも新たに

水俣市立袋中学校では、3年生30人がプロジェクトに参加。9月8日に事前学習、25日に新聞づくり講習を行い、10月9日にダイビング体験を実施しました。ダイビング体験では、NPO法人植物資源の力・代表の金刺潤平先生から、袋湾の生物や干潟の環境について学んだあと、いよいよ海の中へ入って透明度や生き物の有無などを観察。一度は汚染されてしまった地元の海が、どれほどの美しさを取り戻しているかを自分たちの目で確かめるとともに、「このきれいな海を守っていかななくては」と思いを新たにす良い機会になりました。



水俣湾・袋地区

袋地区は、水俣湾の南側に位置し、水俣病発生の原因となった水銀による海洋汚染の影響を大きく受けた海域です。現在は以前の美しさを取り戻し、ダイビングを楽しむことも。澄んだ海中では、海藻やタツノオトシゴ、メバルなどが観察できます。



■発見!! 絶滅危惧種～袋の干潟から～ 3年・中村 雅さん

有明海と不知火海の干潟は、とても大きな干満の差があることで有名です。干潟には、人間が排出する生活排水を分解して高濃度の汚水が直接川へ流れ込むことを防いだり、遠浅な地形が沖合からの波浪を弱めたりするなどの役割があります。そこで、袋中学校3年生は、袋湾の現状を知るために干潟の生物調査を行いました。実際に調査で捕った貝を「ひのくにベントス研究所」の森敬介さんに見てもらったところ、絶滅危惧種のシノノミミガイでした。干潟の海には、ほかにもシギやチドリなどたくさんの鳥もいます。それは、エサとなる小魚が多い豊かな海だからです。まだまだ袋湾の干潟について知らないことが多いので、これからも身近にある袋湾のことを学んでいきたい。

■クリーンアップ大作戦 3年・本山奈々さん

袋中学校では、「海のクリーンアップ作戦」を行い、干潟を含めた海岸周辺を中心にゴミ拾いを実施します。この活動は地域にも呼びかけ、小学生や住民の方々も参加してもらっています。参加してみると、海岸にはたくさんのペットボトルや缶、ビニール袋などが落ちています。「水俣の海はきれい」といわれていますが、実際にゴミを見ると悲しい気持ちになりました。たくさんの方に自慢できる袋の海をきれいに保つためにも、「海のクリーンアップ作戦」を続けていこうと思います。

■24種類のゴミ分別 3年・笹田ゆきなさん

袋中学校の生徒は、各地区のゴミ分別に毎月参加しています。ゴミ分別に参加すると、地域の方々とコミュニケーションが取れ、地域の一員として役に立てます。ゴミは24種類に分けています。昨年11月からは紙バックの分別も行うようになりました。こんなに多くの種類に分けることができると知って驚きました。水俣市は、環境を良くすることに力を入れているので、私も市民としてゴミ分別など、できることからやっていこうと思います。

■日本の環境首都・みなまた 3年・那良恵里華さん

水俣市は、かつて「水俣病」という公害が発生した町です。多くの方が水俣病による健康被害に苦しみ、命を奪われた人もいます。また、差別や偏見によって苦しい思いをしている人もいます。それを教訓にし、水俣市では、環境、健康、福祉を大切にしたい町づくりや環境や自然を生かした町づくりを始めました。平成20年には、国が推進する低炭素社会づくりを先導する環境モデルとして認定されたほか、平成23年には「～持続可能な地域社会をつくる～日本の首都コンテスト第10回」において、全国初の「日本の環境首都」の称号を獲得しました。現在も、水俣市は地域一体となって環境に優しい町づくりを行っており、中学生も多くの活動に参加しています。例えば、学校版環境ISOの取り組みでは、節電・節水、清掃、地域でのゴミ分別参加など、それぞれに目標値を設定しています。中学生の私たちが、何十年後の未来の水俣が今よりもっと美しく、安全で住みやすい町になるように、できることを一つ一つ取り組んでいくことが大切です。水俣病で失われた命や健康、環境のことを忘れずに、この美しい水俣を私たちの手で守っていきたいと思っています。

■海の世界へLet's Go! 3年・中野愛花さん

9月18日にグリーンスポーツ水俣で、海洋教育の一環としてスキューバダイビング体験を行いました。袋湾はプランクトンが多いので白濁していて、小魚やイソギンチャクなど思いの外たくさんの生き物を見ることができました。いつも見えていた袋湾を、より間近で見ることができ、以前より興味が湧きました。袋中学校では年に数回、「クリーンアップ作戦」を行って海の環境保全に取り組んでいますが、これからも袋湾の豊かな海を私たちの力で守っていこうと思います。また、今回は360度カメラを使って袋湾の撮影を行いました。海を全体的に撮影することができ、いつも見る海とは違った不思議な写真が撮れました。とても貴重な体験ができ、最高の思い出になりました。

Keyword check! 水俣病

水俣にあった化学製品製造会社「チッソ」の工場排水に含まれていたメチル水銀が、水俣湾の魚や貝などに入り、その汚染された魚介類をたくさん食べることで多くの人々が被害を受けました。1956年に公式確認され、日本の公害の原点と言われています。脳や神経が侵され、手足のしびれや震え、感覚障害などの症状が出ます。

